

キリシタン時代のメダイ図像研究

長崎純心大学

浅野ひとみ

1549年、ザビエルにより、キリスト教は日本に伝わったが、豊臣秀吉の伴天連追放令を端緒として、厳しい禁教の時代が始まる。1596年の二十六聖人、1622年の元和大殉教など痛ましい記憶を乗り越えて、1873年、パリ外国宣教会によって信仰が復活する。300年間、指導者も持たずに信仰が維持されたのは西欧世界にとって大きな驚異であった。2006年、長崎では、キリスト教遺産群の世界遺産暫定リスト入りを契機にこの〈ロマン〉が強く前面に押し出され定型化しつつある。そのような中で、カクレキリシタンと言われる人々の信仰様態を厳密な意味ではキリスト教徒とみなさない宮崎賢太郎、宣教会主導でない「こんふらりや（信徒信心会）」の機能を綿密に解析した川村信三らの宗教学・史学の先鋭たちの研究は、長崎を始めとする日本の初期・禁教下キリシタンたちの複雑多岐にわたる信仰形態をあらわにしている。

さらに、近年、今野春樹、後藤晃一ら、考古学者がメダイ（宗教図像レリーフのある金属製コイン）の蛍光エックス線を使った成分分析を含め、発掘されたキリシタン遺物の詳細な報告を始めている。

本発表は、これらの、宗教学・史学・考古学的成果に基づいて、キリシタン時代に日本に到来したメダイ図像を美術史プロパーの観点から精細に分析しようというものである。そのためには、まず、純正輸入品であるヨーロッパ製のものと、日本で「踏み返し」という方法でコピーされた和製品を区別しなければならない。発表者は、美術史的な鑑識眼ばかりではなく、全国に残る60例ばかりのメダイのタイプと単位面積あたりの質量の関係をもとに分散表を作成し、①ヨーロッパ製、②和製、③復活期以降のヨーロッパ製メダイとに分け、どのようなタイプのメダイがキリシタン時代に多く流入したかを考察した。その結果、「無原罪の御宿り」図、「アニュス・デイ」（キリストの首）と「聖体讃仰」図とが圧倒的に好まれたほか、著名な巡礼地であるモンセラトなどのマリア像が散見されることがわかった。これらの図像は、多く、イエズス会系、ドミニコ会系などに分類されるが、おそらくは、川村の言うこんふらりあの守護者として信者の結束を強めるために密かに伝えられたものではないかと想定される。

日本のキリシタン時代美術としては、セミナリオから生まれた正統キリスト教絵画が著名であるが、禁教下では、むしろ、民衆の心を支えたのは、鋳物師たちの手でコピーされ、信者間で秘匿されて、伝えられた小さなメダイ図像であった。

本発表は、昨今のカクレキリシタン・ブームの陰で、キリシタン資料館にレプリカや偽物、みやげものが真正品にまぎれて並ぶ世情を憂えて、長崎に住まう美術史学徒の責任として、キリシタン美術研究のあり方に道筋をつけることを一つの大きな目的とするものである。